

論 文

青年期における主観的に認知される家族機能と
理想の家族イメージとの関係性
—動的家族画法 (K-F-D) を用いて—

奥川奈々¹⁾, 西村喜文²⁾

(西九州大学大学院生活支援科学研究科臨床心理学専攻¹⁾, 西九州大学²⁾)

(令和3年3月16日受理)

**Family functions subjectively identified during the adolescence period.
Relationship with Ideal Family Image
— Using Kinetic Family Drawing (K-F-D) —**

Nana OKUGAWA¹⁾, Yoshifumi NISHIMURA²⁾

(*Department of Clinical Psychology, Life Support Science, Graduate School, Nishikyusyu University*¹⁾,
*University of Nishikyusyu*²⁾)

(Accepted March 16, 2021)

Abstract

In this study, using the Kinetic Family Drawing method and the family function measurement scale (Kusada and Okado, 1993), we examined the relationship between family image and family function that we unconsciously seek basing on the “difference in the KFD family depiction depending on the level of the subject’s family function compared to the family function measurement scale” as a hypothesis. There was no gender difference between the cohesive and adaptability scores of the family function measurement scale, however males demonstrated higher correlation coefficient values than females (female $r = .64$, $p = .003$, male $r = .73$, $p = .003$ ($p < .01$), so it can be said the correlation is strong. As a result of classifying the family model into 3 groups from the family function measurement scale, the drawing features of KFD were revealed to be shown in the person, spatial position, style, and action.

Key word : Family function 家族機能
Adolescence 青年期
Kinetic Family Drawings (KFD) 動的家族描画法

1. 問題と目的

近年、家族問題として浮き彫りになっている虐待やアルコール依存といった嗜癖問題だけに限らず、家族内で解決すべき問題が世間に表出されるような事件化となるまで発展し、ニュースや新聞等のマスメディアが大きく取り上げることも少なくはない。昨夏、筆者が少年鑑別所のインターンシップに参加した際、非行や犯罪に手を染める背景として家族関係に問題を抱えているケースが多いことを痛感した。それらに共通する点は「家族機能が不全な状態である」ということではないかと考える。家族機能に着目すると、その定義は様々であるが、Ogburn(1933)は近代工業以前の家族機能について「①経済・②地位付与・③教育・④保護・⑤宗教・⑥娯楽・⑦愛情」の7機能を挙げている。Ogburn(1933)の定義を参考にすると、現代の家族関係において、個人間の境界が曖昧で家族成員にプライバシーがない等の④の保護機能の欠如や、自己愛型家族といった⑦の愛情機能が過剰化あるいは不足しているため、家族内外において引き起こされる問題が多いのではないだろうか考える。

一見、問題行動という部分だけに焦点を当てると引き起こした本人が悪いという印象を抱きやすいただろう。しかし、そういった問題行動を起こすという背景には彼らなりの伝えたいメッセージが隠されているからではないだろうか。真の発信したいメッセージがあるからこそ、外に向けられる攻撃性(acting out)として行動化されたり、内に向けられる攻撃として自傷行為などが生じるのではないかと考える。言語化できない気持ちを非言語的手段で伝えることは心理療法において芸術療法と共通する部分があるのではないだろうか。

したがって、本研究では動的家族描画法(Kinetic Family Drawings: 以下KFD)という描画法と家族機能測定尺度(草田・岡堂, 1993)を用いて、親になる前の青年期の若者はどのような理想の家族を求めているのか、家族問題が広く取り沙汰される現代だからこそ無意識下において求める家族イメージと現実の家族機能との関係に対して検討したい。

2. 方法

1) 調査対象

西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科3

年生36名のうち、回答に不備がみられた2名のデータを除外し、34名を調査対象とした。内訳は男性14名、女性20名である。

2) 調査日

2019年4月23日

3) 調査手続き

被験者に卒論の主旨の説明とパワーポイントを使って家族描画法とKFDに関して説明を行った後、研究同意書の記入を行わせた。その後、家族機能測定尺度の記入を無記名で行わせ、教示は次のようにした。家族機能測定尺度においては「あなたの家族の現在の様子についておたずねします。次の各項目について、最もよくあてはまると思うところに○をつけてください。」とした。KFDにおいては「あなたを含めて、あなたの家族みんなについて、何かしている理想の場面を絵に描いて下さい。漫画や棒のような人ではなく完全な人を描いて下さい。」と教示した。また教示に含まれる条件を満たしてさえいれば、あとは自分の好きなように自由に描いて良いことも伝えた。

その後、被験者にKFDに関するフェイスシートの記入を行わせた。

4) 質問内容

フェイスシートの質問内容は「①被検者の性別②同居の有無③描かれた人物が誰なのか④人物を描いた順番⑤何をしている場面か⑥現実によくある場面か」の以上6項目とした。

5) 分析方法

家族機能測定尺度において、凝集性尺度得点は奇数番号の項目の合計得点とした。適応性尺度得点は偶数番号の項目の合計得点とし、逆転項目の18, 20は反転して尺度合計得点に加えた。凝集性得点と適応性得点において男女間の有意差をみるために、有意水準5%で両側検定の t 検定を行った。

男女間の凝集性得点と適応性得点の相関をみるために、ピアソンの積率相関係数を求めた。

KFDに関しては、家族機能測定尺度よりOlsonら(1985)の円環モデルに基づき、家族モデルを極端群、中間群、バランス群に分類し、様式、描写人物、空間的位置、行為の相関をみるため、 χ^2 検定を行った($p>.05$)。

3. 結 果

1) 凝集性と適応性との関係

まず、凝集性得点と適応性得点において男女間の有意差をみるために、有意水準5%で両側検定の t 検定を行った。

凝集性得点の男女差を t 検定したところ、($t=1.36$, $p=.18$) により有意差はみられなかった (Table 1.)。次に、適応性得点の男女差を t 検定したところ、($t=.4$, $p=.69$) により有意差がみられなかった (Table 2.)。

最後に、男女間の凝集性得点と適応性得点の相関をみるために、ピアソンの積率相関係数を求めた。女性は ($r=.64$, $p=.003$ 、男性は $r=.73$, $p=.003$ ($p<.01$)) より相関は有意であり、男性のほうが女性よりも相関関係値が高かった (Table 3.)。

Table 1. t 検定による凝集性得点の男女差

	N	SD	t
女性	32.75	6.99	
男性	28.71	10.36	1.36

Table 2. t 検定による適応性得点の男女差

	N	SD	t
女性	28.65	6.15	
男性	27.79	6.27	ns

Table 3. 凝集性得点と適応性得点の相関

	df	r	p
女性	20	0.64	.003 ($p<.01$)
男性	14	0.73	.003 ($p<.01$)

結果をまとめると、

- ① 家族機能測定尺度の凝集性得点と適応性得点において性差はみられなかった。
- ② 凝集性得点と適応性得点の相関係数に着目すると男性のほうが女性よりも高かった。
- ③ 性差で比較すると男性のほうが女性より相関係数値が高かったため男性のほうが相関関係は強いことがわかった。

2) 家族機能と円環モデルの関係

Table 4. は家族機能測定尺度の結果より Olson ら (1985) の円環モデルに基づき、凝集性、適応性の次元ごとに高群から低群までレベルごとに4段階に分類し、それらを組み合わせて家族を16タイプに分類したものである。凝集性は高い次元から膠着、結合、分離、遊離、適応性は高い次元から無秩序、柔軟、構造化、硬直の4段階に分類されている。また、16タイプはそれぞれ「無秩序-遊離」、「柔軟-遊離」、「構造化-遊離」、「硬直-遊離」、「無秩序-分離」、「柔軟-分離」、「構造化-分離」、「硬直-分離」、「無秩序-結合」、「柔軟-結合」、「構造化-結合」、「硬直-結合」、「無秩序-膠着」、「柔軟-膠着」、「構造化-膠着」、「硬直-膠着」とされている。Olson ら (1985) はこれらの16タイプを極端群、中間群、バランス群の3群に分類した。

極端群は4タイプあり、①適応性が高く、凝集性が低い「無秩序-遊離」、②適応性が低く、凝集性も低い「硬直-遊離」、③適応性が高く、凝集性も高い「無秩序-膠着」、④適応性が低く、凝集性も高い「硬直-膠着」である。中間群は8タイプあり、①適応性がやや高く、凝集性は低い「柔軟-遊離」、②適応性がやや低く、凝集性も低い「構造化-遊離」、③適応性が高く、凝集性はやや低い「無秩序-分離」、④適応性が低く、凝集性もやや低い「硬直-分離」、⑤適応性が高く、凝集性もやや高い「無秩序-結合」、⑥適応性が低く、凝集性はやや高い「硬直-結合」、⑦適応性がやや高く、凝集性も高い「柔軟-膠着」、⑧適応性がやや低く、凝集性は高い「構造化-膠着」に分類される。バランス群は適応性、凝集性の両方のバランスが取れているものとして、①「柔軟-分離」、②「構造化-分離」、③「柔軟-結合」、④「構造化-結合」の4タイプに分類される。

Table 4. より被験者を16タイプに分類したところ、2名の出現がみられたのが、「構造化-遊離」、「硬直-分離」、「構造化-結合」、「柔軟-膠着」の4タイプであり、3群に分けてみると中間群で6名、バランス群で2名みられ、極端群の者はみられなかった。3名の出現がみられたのが、「無秩序-結合」、「無秩序-膠着」、「構造化-膠着」の3タイプであり、極端群で3名、中間群で6名、バランス群の者はみられなかった。4名の出現がみられたのが、「柔軟-分離」、「構造化-分離」、「柔軟-結合」の3タイプであり、バランス群で12名であったのに対し、極端群、中間群の者はみられなかった。極端群

に分類される「硬直－遊離」タイプでは唯一5名の出現がみられた。3群ごとの人数と割合に着目すると、極端群が8名(23.5%)、中間群が12名(35.3%)、バランス群が14名(41.2%)であり、大きな差は生じていないもののバランス群が全体の4割を占める割合となった。

Table 4.
Olsonの円環モデルに基づくタイプ分類と人数(名)

	遊離	分離	結合	膠着
無秩序	0	0	3	3
柔軟	0	4	4	2
構造化	2	4	2	3
硬直	5	2	0	0

Table 5. はバランス群、中間群、極端群の3群を男女別に分類した結果である。3群ごとの人数の割合に着目するとバランス群が41.2%と最も高く、次いで中間群が35.3%、極端群が23.5%であった。男女別の割合を比較すると、男性はバランス群、中間群は11.8%であったのに対し、極端群は17.6%と高かった。女性はバランス群が29.4%、中間群が23.5%と差がみられたが、極端群は5.9%と最も低かった。

分類した3群と男女の間に関連性があるかをみるためにピアソンの χ^2 検定を行ったところ、($\chi^2=5$, $df=2$, $p=0.08$ ($p>.05$))であり統計的に有意ではなかった。

Table 5.
分類した3群による男女別人数と割合 (%)

	極群	中群	バ群	計
男性	6(17.6)	4(11.8)	4(11.8)	14(41.2)
女性	2(5.9)	8(23.5)	10(29.4)	20(58.8)
計	8(23.5)	12(35.3)	14(41.2)	34(100)

以上の結果をまとめると、

- ①全体での3群ごとの人数と割合では、バランス群が全体の4割を占める割合となった。
- ②さらに性別ごとに分類すると男性は極端群が最も多く、女性はバランス群が最も多かったが、分類した3群と男女間には関連性はみられなかった。

3) 動的家族画法 (KFD) の様式

Table 6. は Table 4. より Olsonら (1985) の円環モデルをもとに家族を16タイプに分類したものを極端群、中間群、バランス群の3群にまとめ、KFDの様式 (Style) ごとの割合を算出したものである。

実験対象者のKFDを分析するとその様式 (Style) は包囲、辺縁位、一般的様式、区分の4様式の形態がみられたが、人物下線、上部の線、下部の線は3群共通してみられなかった。様式 (Style) に関して説明を加えたい。区分とははっきりとした直線などで特定の成員を他成員と分け、別の空間に位置付けるような拒絶的な様式である。包囲は机や縄跳びなどで体をおおうように自身や他成員を閉じ込めてしまう様式で、日比 (1986) によると「他者に対して、あるいは他者との関係における自分自身に開放的な感情的態度を持ち得ないとき、他者あるいは自分自身を閉じ込めてしまう」ものである。辺縁位は用紙に沿って人物を描く様式である。3群共通して包囲は最も多い様式であった。極端群では包囲と一般的様式、区分に顕著に差の開きがみられた。一方中間群では包囲と辺縁位に差の開きがみられ、バランス群も同様の結果となった (Table 6.)。

家族モデル3群と様式ごとの人数と割合において関連性をみるためにピアソンの χ^2 検定を行ったところ、($\chi^2=3.77$, $df=6$, $p=.71$)より統計的に有意ではなかった。

Table 6. 家族モデル3群における様式 (Style) の人数と割合 (%)

様式	極群	中群	バ群	計
包囲	4(11.8)	6(17.6)	6(17.6)	16(47.0)
辺縁位	2(5.9)	1(2.9)	1(2.9)	4(11.7)
一般的	1(2.9)	2(5.9)	5(14.7)	8(23.5)
区分	1(2.9)	3(8.8)	2(5.9)	6(17.6)

結果をまとめると、

- ①3群共通して包囲は最も多く辺縁位は少なかった。
- ②家族モデル3群と様式ごとの人数と割合において関連性はみられなかった。

4) 描写された人物の順位

Table 7. はKFDに描かれた人物像の描写順位において、最初に描写された人物と割合を家族モデル

3群ごとに分類した結果である。全体の割合としては、最初に描写された人物では「父」が44.1%、「私」が26.5%、「母」が17.6%、「同胞」が8.8%、「ペット」が2.9%であり、「父」を最初に描写した者が全体の4割を占める割合となった。3群ごとに人物と割合をみていくと、極端群とバランス群ではそれぞれ14.7%、23.5%と「父」を最初に描写する者が多く、中間群では「私」を最初に描写した者が14.7%と多かった。

Table 7. より χ^2 検定を行ったところ、($\chi^2=11.43$, $df=8$, $p=.17$) より統計的に有意ではなかった。

Table 7. 家族モデル3群における最初に描写された人物と割合 (%)

人物	極群	中群	バ群	計
父	5(14.7)	2(5.9)	8(23.5)	15(44.1)
私	2(5.9)	5(14.7)	2(5.9)	9(26.5)
母	0(0.0)	2(5.9)	4(11.8)	6(17.6)
同胞	1(2.9)	2(5.9)	0(0.0)	3(8.8)
ペット	0(0.0)	0(0.0)	1(2.9)	1(2.9)
祖父母	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

Table 8. は最後に描写された人物と割合を家族モデル3群ごとに分類した結果である。全体の割合としては、最後に描写された人物では「同胞」が32.4%、「私」が26.5%、「母」が17.6%、「父」が11.8%、「祖父母」と「ペット」がそれぞれ5.9%であり、「同胞」を最初に描写した者が全体の3割を占めた。「父」を最初に描写した人物では全体の4割を占めていたのに対し、最後に描写した人物では全体の1割であった。3群ごとに人物と割合をみていくと、極端群では17.7%で「私」、中間群では14.7%、バランス群では17.7%で「同胞」を最後に描写した者が多かった。

Table 8. より χ^2 検定を行ったところ、($\chi^2=17.82$, $df=10$, $p=.06$) より統計的に有意ではなかった。また、Table 7. と Table 8. より描写された人物の描写順位と家族モデル3群との間に関連があるかを調べるため、Mann-Whitney 検定に Bonferroni の修正を施す多重比較を行った。人物像の描写順位に関しては、全体の被験者のうち20名以上が描いた、「私」、「父」、「母」に限定し、それらを分析対象項目とした。「私」においては($r=.38$, $df=2$, $p=.02$ ($p<.05$)) より統計的に有意であった。「父」にお

いては($r=.15$, $df=2$, $p=.39$) より統計的に有意ではなかった。「母」においては($r=.12$, $df=2$, $p=.47$) より統計的に有意ではなかった。

Table 8. 家族モデル3群における最後に描写された人物と割合 (%)

人物	極群	中群	バ群	計
同胞	0(0.0)	5(14.7)	6(17.7)	11(32.4)
私	6(17.7)	1(2.9)	2(5.9)	9(26.5)
母	0(0.0)	2(5.9)	4(11.8)	6(17.6)
父	1(2.9)	2(5.9)	1(2.9)	4(11.8)
祖父母	0(0.0)	1(2.9)	1(2.9)	2(5.9)
ペット	1(2.9)	1(2.9)	0(0.0)	2(5.9)

以上のことから結果をまとめると、

- ①「父」を最初に描写した者が全体の4割を占める割合であり、極端群とバランス群に多くみられた。中間群では「私」を最初に描写した者が最も多かった。
- ②描写された人物と3群との間に関連性はみられなかった。
- ③最後に描写された人物では、中間群とバランス群にみられた「同胞」が最も多く全体の3割を占めていた。
- ④描写された人物と描写順位の間には「私」のみ関連がみられた。

6) 動的家族画法 (KFD) における位置関係

Table 9. は KFD に描かれた「私」の位置ごとの人数の割合をまとめたものである。描画を右上部、左上部、右下部、左下部、中央の5つに分割し、それらを分析対象とした。全体として自己像を左下部に描いたものが32.4%と3割を占め、次いで右下部、中央が26.5%で顕著に差はみられなかった。しかし対照的に左上部と右上部はそれぞれ8.8%、5.9%と少なかった。3群ごとにみていくと、極端群では右下部が8.8%、中間群では左下部が14.7%、バランス群では左下部、右下部、中央が11.8%と最も多かった。全体を通して、上部より下部のほうが自己像の空間的位置の割合としては多い結果であった。

Table 9. 家族モデル 3 群における「私」の空間的位置と人数の割合 (%)

位置	極群	中群	バ群	計
左下部	2(5.9)	5(14.7)	4(11.8)	11(32.4)
右下部	3(8.8)	2(5.9)	4(11.8)	9(26.5)
中央	1(2.9)	4(11.8)	4(11.8)	9(26.5)
左上部	1(2.9)	0(0.0)	2(5.9)	3(8.8)
右上部	1(2.9)	1(2.9)	0(0.0)	2(5.9)

結果をまとめると、

- ①全体では自己像を左下部に描いたものが3割を占め、左上部と右上部は少なかった。
- ②全体を通して、上部より下部のほうが自己像の空間的位置の割合としては多かった。

7) 動的家族画法 (KFD) における行為

Table10. は KFD に描かれた家族モデル 3 群における行為ごとの出現数 (回) と割合 (%) である。計15の行為に分類され、全体で最も出現数の高かった行為は「テレビ鑑賞」で40.6%であった。次いで「食事」が26.1%、「睡眠」、「餌やり」が8.8%であった。また「テレビ鑑賞」だけ、「食事」だけに限定されず、「テレビを観ながら食事をしている」行為もあったため、その場合は「テレビ鑑賞」と「食事」にそれぞれ1回の出現数として算出した。全体をみて出現数の高いテレビと食事の割合の合計は7割以上を占めていた。

3群ごとの行為ごとの出現数と割合をみると、極端群は「テレビ鑑賞」が5.9%、「食事」、「睡眠」、「餌やり」、「ドライブ」、「整備」、「水やり」、「団らん」、「読書」がそれぞれ2.9%であった。中間群は「テレビ鑑賞」、「食事」がそれぞれ11.6%、「撮影」が5.9%、「餌やり」、「ドライブ」、「キャンプ」、「布団干し」、「こたつ」、「バドミントン」がそれぞれ2.9%であった。バランス群は「テレビ鑑賞」が23.5%、「食事」が11.8%、「睡眠」が5.9%、「餌やり」、「ペット」、「皿洗い」が2.9%であった。3群の中で「テレビ鑑賞」、「食事」共にバランス群に最も多くみられた行為であった。

Table11. は Table10. を基に動的行為、静的行為、家の中での行為、家の外での行為の4つに分類しまとめたものである。まず全体をみると動的行為は「食事」、「餌やり」、「ドライブ」、「整備」、「水やり」、「キャ

Table10. 家族モデル 3 群における行為ごとの出現数 (回) と割合 (%)

行為	極群	中群	バ群	計
テレビ	2(5.9)	4(11.6)	8(23.2)	14(40.6)
食事	1(2.9)	4(11.6)	4(11.6)	9(26.1)
睡眠	1(2.9)	—	2(5.9)	3(8.8)
餌やり	1(2.9)	1(2.9)	1(2.9)	3(8.8)
撮影	—	2(5.9)	—	2(5.9)
運転	1(2.9)	1(2.9)	—	2(5.9)
整備	1(2.9)	—	—	1(2.9)
水やり	1(2.9)	—	—	1(2.9)
キャンプ	—	1(2.9)	—	1(2.9)
皿洗い	—	—	1(2.9)	1(2.9)
布団干し	—	1(2.9)	—	1(2.9)
こたつ	—	1(2.9)	—	1(2.9)
バドミントン	—	1(2.9)	—	1(2.9)
団らん	1(2.9)	—	—	1(2.9)
読書	1(2.9)	—	—	1(2.9)

ンプ」、「皿洗い」、「布団干し」、「バドミントン」の9行為であり、出現数は全体で20回あり58.6%でみられた。静的な行為は「テレビ鑑賞」、「睡眠」、「撮影」、「家族団らん」、「読書」の5行為であった。出現数は全体で22回あり61.7%でみられた。また、家の中での行為は「テレビ鑑賞」、「食事」、「睡眠」、「皿洗い」、「こたつ」、「家族団らん」、「読書」の7行為であり、出現数は30回で88.1%であった。家の外での行為は「餌やり」、「撮影」、「ドライブ」、「整備」、「水やり」、「キャンプ」、「布団干し」、「バドミントン」の8行為であり、出現数は12回で35.1%であった。よって、全体では動的行為よりも静的行為のほうが3.1%上回り、家の外での行為よりも家の中での行為が53%上回り、8割を占めていたことから、描画特徴としては家の中での行為が多く、力動的な印象はあまり見受けられなかった。

3群ごとの行為を4分類した際の出現数と割合をみると、極端群では動的と静的な行為はそれぞれ5回ずつみられ14.5%であった。家の中での行為が6回で17.4%、家の外での行為が4回で11.6%であった。極端群では動的行為、静的行為共に差はみられず、家の外での行為よりも家の中での行為が5.8%上回った。

中間群では動的行為は13回で37.7%、静的行為は

3回で8.7%であった。家の中での行為が9回で26.1%，家の外での行為が7回で20.3%であった。中間群では動的行為が静的行為よりも29%上回っており、家の中での行為が家の外での行為よりも5.8%上回っていた。よって描画特徴としては動的行為が多く力動性を感じられる作品であり、家の中での相互作用も感じられる作品であるといえる。

バランス群では動的行為は6回で17.4%であり、静的行為が10回で20.9%であった。家の中での行為が15回で43.5%，家の外での行為が1回で2.9%であった。

Table11. 4項目の行為分類における出現数と割合（%）

項目	極群	中群	バ群	計
動的	5(14.5)	13(37.7)	6(17.4)	20(58.6)
静的	5(14.5)	3(8.7)	10(20.9)	22(61.7)
家内	6(17.4)	9(26.1)	15(43.5)	30(88.1)
家外	4(11.6)	7(20.3)	1(2.9)	12(35.1)

以上のことより、結果をまとめると、

- ①全体で最も出現数の高かった行為は「テレビ鑑賞」であり、3群の中で「テレビ鑑賞」,「食事」共にバランス群に最も多くみられた行為であった。
- ②全体では動的行為よりも静的行為のほうがわずかに上回り、家の外での行為よりも家の中での行為が8割を占めていた。

4. 考 察

1) 凝集性と適応性との関係

家族機能測定尺度の結果から、凝集性得点と適応性得点の男女差をみるために t 検定をしたが、男女間に有意差はみられなかったため性差はないことがわかった (Table 1., Table 2.)。また、凝集性得点と適応性得点の相関をみるため、 $p < 0.01$ でピアソンの積率相関係数を求めたところ $p = 0.003$ ($p < 0.01$) より相関は有意であった (Table 3.)。また、男女差で比較すると男性のほうが女性より相関関係値が高いため男性のほうが相関関係は強いといえる。

2) 家族機能と円環モデルの関係

Olson ら (1985) の円環モデルに基づき、被験者の家族モデルを16タイプに分類した結果では、バラ

ンス群が41.2%であり全体の4割を占めていた (Table 4.)。また、中間群を占める割合は35.3%、極端群では23.5%だったことから3群を比較した際に大差はみられなかったものの、被験者の4割が凝集性と適応性の双方のバランスがとれており、家族機能が適切に働いているといえる。立山 (2007) によると、両次元とも中間のレベルで働くことが最も機能的であり、高すぎても低すぎても家族は機能的でなくなるという、相対的な中範囲理論仮説である事と見解を示しており、この関係について Olson は二次曲線的な関係と呼んでいる。つまり被験者の3割が家族関係において安定した二次曲線的な関係を築けていると考える。しかし、凝集性、適応性が極端なレベルである極端群が全体の23.5%であったことから、被験者の2割が家族のライフサイクルにおいて何らかの問題を抱えていることも懸念される。家族モデルをさらに男女間で分類した際、男女間において有意差はみられなかった ($p = 0.08 > 0.05$)。よって、家族モデル3群と性別との間に相関がないといえる (Table 5.)。

3) 動的家族画法 (KFD) の様式

描画の様式では包囲、辺縁位、一般的様式、区分の4様式が表出されたが、有意差はみられなかったことから、家族モデル3群と様式との間には関連性がないといえる (Table 6.)。星野 (1991) によると、包囲は他の者に開放的な感情を持っていない場合にその人物か、自分を閉じ込める様式であるが、強い恐れや不安の表現とされている。自動車を描いた被験者がいたが、父以外の家族成員を自動車という枠のなかで囲んで描いていたため他成員に対して否定的な感情は見受けられなかった。辺縁位は防衛的な者が描く場合が多いとされている。一般的様式はおだやかな友好的相互関係であり安定した関係性が描画からも伝わってきた。区分はその人物の孤立化と描画者が区分化した人物からの逃避的傾向を示される。

4) 描写された人物の順位

加藤 (1986) によると、描画順位には家庭内の日常的序列、相対的重要度が表れるとされる。描写順位において、「最初」に描いた人物と「最後」に描いた人物に限定したところ、全体的に「父」を最初に描いた者が最も多く (Table 7.)、最後に「同胞」を描いた者が最も多かった (Table 8.) が統計的

に有意差はみられなかった。しかし「最初」に描いた人物と「最後」に描いた人物に限定せず、描写順位を全体の被験者のうち20名以上が描いた「私」、「父」、「母」に限定して統計処理を行ったところ、「私」のみ有意差がみられた ($p=0.02<0.05$)。このことから描写順位と「私」との間に関係性があることがわかった。日比 (1986) によると描写順位は相当に意識的レベルの問題であって、適応上の問題を有していない被験者の多くは、「父」を最初に描くと述べている。極端群にも「父」を最初に描いた者が多くみられたが、日比の解釈を参考にすると、適応性や凝集性において過度な極端群は適応上の問題をあまり抱えていないことになる。つまり極端群であっても「父」を最初に描く者が多かったため、父を相対的に重要な存在として認識していることが読み取られた。

5) 描写された人物の分類

描写された人物等は、「同胞」、「私」、「母」、「父」、「祖父母」、「ペット」の6分類であった。しかし、被験者のなかには「父」を描かなかった者も2名いた。日比 (1986) によると描画における抹消・省略はその人物に対して敵意・否定感情を抱いている場合が多いといわれている。一方、星野 (1991) は家族の主要な成員である父・母を描かない場合は、敵意や否定感情を必ずしも抱いているとはいえない場合もあるという。被験者の描画を見直してみると、父を省略して家族でドライブ、父を省略して布団干しやテレビを家族で観ているという行為をしていた。その描画からは快活な和気あいあいとした印象を見受けられており、家族成員に対しても希薄さや相互交流の乏しさは見受けられない印象を受けた。星野の意見を参考にすると、ある特定の人物を省略・抹消したからといって「否定感情」のない場合もあるように考える。

6) 動的家族画法 (KFD) における位置関係

KFDに描かれた「私」の位置ごとの人数と割合では、全体を通して、上部より下部のほうが「私」の空間的位置の割合としては多い結果であった (Table 9.)。日比 (1986) によると、下部の位置に描かれる人物は抑うつ感情や沈滞感と関係するとされ、反対に上部の位置に描かれる人物は家族内でのリーダーとしての役割を与えられている存在として解釈されている。木村 (1985) の空間象徴を参考にすると、

下部は「物質」、「無または非意識」、「集合無意識」と表現されており、より無意識下に存在している世界が投影されやすいのではと考える。全体を通して家族における「私」は、家族内において自らリーダーとして引っ張っていく中心的人物というよりも沈静的であり、縁の下の力持ちのような役割であることが推察される。

3群ごとに分類した結果において最も多かった位置は、極端群は右下部で8.8%、中間群は左下部で14.7%、バランス群は中央、左右下部で11.8%であった。極端群で最も多かった右下部は、空間象徴において「刺激・本能」、「物質」、「地獄」などと表現されていた。極端群は家族関係において凝集性が過度に遊離、結合しており、柔軟性が過度に柔軟、硬直している群とされている。そのため家族内における「私」も家族関係において時には「地獄」や「悪魔」を感じることもあるのかもしれないと推察する。中間群で最も多かった左下部は「発端-後退」、「誕生」などと表現されていたため、家族内における「私」は退行のように誕生や旧式の状態に戻る状態を繰り返しながら自己成長をしているのではと考える。バランス群で最も多かった下部は「誕生」と「墜落」など相反する二面性を持ち合わせており、家族内における「私」も変化に対応しながら死や再生を繰り返しているのではないだろうか。「墜落」のみならず「誕生」の部分も持ち合わせていることにより、調和のとれた関係が家族内においてもとれているのかもしれない。

7) 動的家族画法 (KFD) における行為

KFDに描かれた家族モデル3群における行為ごとの出現数と割合では、全体をみると出現数の高い「テレビ鑑賞」と「食事」の割合の合計は7割以上を占めていた。また、3群の中で「テレビ鑑賞」、「食事」共にバランス群に最も多くみられた行為であった。よって、それらが家族憩いの場である居間での行為であるため、安定しているバランス群に多くみられたといえる。一方で極端群の中にも「ドライブ」、「家族団らん」行為を描いた者もいたため家族間における相互交流が表出された結果でもあった。中間群は「テレビ鑑賞」、「食事」、「撮影」、「キャンプ」、「バドミントン」などから家族一緒に行う行為が多く、過度な癒着や希薄さのみられない家族における安定した関係性が読み取られた (Table 10.)。日比 (1986) によると、テレビやそれを観ることは、KFD

の描画に頻発するテーマであり、わが国の多くの家庭の今日的風潮としての普遍的側面を意味しているものの描画への投影との見解を示している。また、家庭で安息を求める姿は臨床群には認められないとされており、「テレビ鑑賞」は全体の4割を占めていたことから被験者の心身の健康レベルも安定しているといえる。

動的行為、静的行為、家の中での行為、家の外での行為の4つに分類した結果、全体の描画特徴としては家の中での行為が多く、力動的な印象はあまり見受けられなかった。また、「家族が何かをしている場面を」と教示したが家の中では設定していないため家の中での行為が多いということは被験者が描く家族イメージにおいて家という場所は家族を表現する意味で重要な要素となるものだろうかと考える。

以上より、KFDにおいて家族モデル3群ごとに描写特徴が表出されていたことから仮説は立証されたといえる。しかし全体的にみてKFDに特徴づけられる「動的」要素は静的要素と比較した際に大差は見受けられなかったことや、家族機能測定尺度において有意差は見られなかった点は被験者の人数の少なさが関連しているのかもしれないと考える。

〈付記〉

本論文は、西九州大学に提出した卒業論文（2019年度）に加筆、修正を加えたものである。

参考文献

- 1) Ogburn, W. F. (1929). The changing family. Publications of the American Sociological Society, 23, 124-133.
- 2) Olson, D. H., Portner, J., and Lavee, Y. (1985) FACES III. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota Press.
- 3) 加藤孝正 (1986) 動的家族画 (KFD) 臨床描画研究 1, 87-104.
- 4) 木村晴子 (1985) 箱庭療法 - 基礎的研究と実践 - 創元社.
- 5) 草田寿子 (1995) 家族関係単純図式投影法の基礎的研究 - 家族関係査定法としての可能性 カウンセリング研究, 28(1), 21-27.
- 6) 草田寿子 (1995) 日本語版 FACES III の信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, 28(2), 154-162.
- 7) 草田寿子・岡堂哲雄 (1993) 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版.
- 8) 黒川 潤 (1990) 円環モデルに基づく尺度 (和訳版) の標準化の試み - 家族満足度 親 - 青年期の子どものコミュニケーション, FACES III について. 家族心理学研究, 4 (2), 71-81.
- 9) 杉本和美 (1998) 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9 (1), 45-55.
- 10) 立山慶一 (2007) 家族機能測定尺度 (FACES III 邦訳版) の信頼性・妥当性に関する一研究. 創価大学大学院紀要, 28, 285-305.
- 11) 田中 宏 (1989) 少年鑑別所における家族画の活用 家族画ガイドブック 矯正協会.
- 12) 日比裕泰 (1986) 動的家族描画法 (K-F-D) - 家族画による人格理解 - ナカニシヤ出版.
- 13) 星野俊治 (1991) 動的家族描画法の有効性に関する一考察 情緒障害教育研究紀要 10, 133-140.